

永安公主なりしが、新唐書諸公主傳によれば「永安公主長慶初（實は元和十一年三月）許下嫁回鶻保義可汗、會可汗死、止不行」と記し、諸書中獨り唐會要のみ此の消息を明かにして、長慶元年「五月廻鶻宰相都督公主摩尼等至、迎所降公主也、初保義可汗求婚、許降以永安公主、保義既卒則宜改定、而酋人固請永安、尋以第五（十之誤）妹、封太和公主、出降廻鶻」と記せり、されば長慶元年二月若くは三月に死したる保義可汗が、五月に至りて使を遣し太和公主を迎ふべき理由の存する無ければなり、此の如く公主降嫁の許は、初め保義可汗に對して與へたるものなりしも、事實として之を迎へしものは、繼ぎて立ちし崇徳可汗なりしこと次章に於て述ぶるが如し。

元和八年回鶻と唐との間が危殆の情態に陥りしより、茲に至る迄七年の間、回鶻の要求は唐の容るゝ所とならざりしに拘はらず、回鶻は唐に對して何等加ふる所あらざりしが如く、諸書何れも其の記載を有するものなし、而して冊府元龜互市篇に元和十年八月絹十萬疋、同年十二月絹九萬七千疋、同十一年二月（一四二）繒絹六萬疋、同年四月絹二萬五千疋を以て、回鶻の馬直を償ひしこと記され、又同書朝貢篇に元和九年十一月、同十年一月及び二月に回鶻が朝貢せしことを記せるよりして考ふれば、元和八年の事件以後も回鶻は唐に對して、兎も角も平和の關係を持續し、互市の利を貪りたるものなりしは疑ふ可らず。

轉じて當代に於る漠北の事情を考ふるに、回鶻と隣接諸部との關係は依然として紛亂の情態を續けたるが如く、回鶻が南方唐に對して大に壓迫の態度に出づる無かりしものも、恐らく此の事情に因る所多かりしなるべきを思はしむ、Kara Balgassun に存する九姓廻鶻（愛登里囉汨沒密施合毗伽可汗聖文神武碑が主として此の可汗の紀功の爲に建てられたるものにして、其のXII行以下に記せる所が、全く此の可汗の事業を録したるものなることは、篇末の